

# 土門 剛



土門 剛 どもん たけし

【プロフィール】

1947年大阪市生まれ。早稲田大学大学院法学研究科中退。農業や農協問題について規制緩和と国際化の視点からの論文を多数執筆している。主な著書に、『農協が倒産する日』（東洋経済新報社）、『穀物メジャー』（共著／家の光協会）、『東京をどうする、日本をどうする』（通産省八幡和男氏と共著／講談社）、『新食糧法で日本のお米はこう変わる』（東洋経済新報社）などがある。大阪府米穀小売商業組合、「明日の米穀店を考える研究会」各委員を歴任。会員制のFAX情報誌も発行している。

統計部が抱える深刻な病巣を白日の下に晒してみたい。

## 記事の粗探しは荒っぽすぎた

窪田課長への電話取材は11月10日。11月号のコピーが生産流通消費統計課にも渡っていると思い、記事の感想を聞かせてもらおうことが半分、着弾状況の確認が半分という目的で電話してみたのだ。着弾状況と表現したのは、記事で指摘した問題点について見直しに取り組む意思があるかどうかを探るのが目的と説明しておく。

前月号で統計部の「作況調査」が、「歩留まりを考慮しない欠陥調査」と厳しく批判しておいた。

さっそく農水省が動き始めた。省内上層部から「問題指摘はしっかり受けとめた。見直すよう統計部に指示しておいたよ」とのメッセージが届いた。生産流通消費統計課もその方向で動くものと思い、窪田修課長に電話取材したところ、思わぬ反応が戻ってきた。いきなり記事のミスをあげつらってきたのだ。それも重箱の隅をほじくるような些細なものだった。それだけではない。虚偽文書まで示して記事の内容を否定しようとしてきた。

取材中、親切心で「省内上層部は見直しの方向だよ」とシグナルを送っても、「聞いたことはない」と言い放つ有様。それならばターボチャージャーをかけて追及することにした。

組上り上げたのは筆者を騙そうとした虚偽文書。その矛盾点を執拗に追及したら、答えに窮してしまい、取材途中にもかかわらず、電話を一方的に切ってきた。農水省のガン、

## 農水省課長とのやりとりで垣間見た統計部の深刻な病巣

省内上層部は、作況調査の見直しを求める方向で意思統一している。窪田課長が抵抗するというのは、彼の部下が見直しに反対していて、窪田課長はそれに乗ったという図式と読み取った。窪田課長が、そういうスタンスを決めたとしたら、部下との軋轢を避けたかったというダメ公務員の定番コースだ。

拙稿に対する粗探しは荒っぽすぎた。最初に指摘したのは、51ページの「統計部は、15年3月に調査方法

を変えている」という部分。窪田課長は人が悪いというか、最初から西暦と元号を取り違えたうっかりミスであることに気がついていながら、鬼の首でも取ったように「間違っている」と指摘してきた。あまりにも失礼な言い方をしてきたので、つい「それが記事の本質と何の関係があるのか。あるならきちんと言明してみろ」と声を荒げてやると、とたんに黙り込んでしまった。

その態度でエンジンがかかった。そうなる売り言葉に買い言葉、「ほかに間違いはあるかい」と挑発してやった。待つてましたとばかりに持ち出してきたのが、52ページの「登熟歩合」の調査方法についての記述。皮肉なことに、その指摘は窪田課長にとつて墓穴を掘ることになる。

電話でのやりとりでも、窪田課長が作況調査の実務に通じていないことが何となく分かった。現場のことを正確に理解しているとは思えなかった。いくら質問しても要を得た回答が戻ってこないからだ。そんなことから、その日の電話のやりとりは6回ぐらいに及んだか。取材の途中、失礼とは思いつつ、「部下に聞くだけなく、自分の頭で考え、ときには省内の関係部署にもアドバイスを求めてみることで」と諭してやることもあった。

## でっぴ上げ論法で 記事否定

窪田課長とのやりとりでのポイント、調査法が「歩留まり」を考慮しているかどうかという点。この場合における「歩留まり」とは、「稔実歩合」と「登熟歩合」の2点になる。時系列で説明すると、まず稲に実がなる稔実があり、次いでその実が充実して米粒になる登熟へと続く。「歩合」というのは、前者が調査対象としたすべてののみ数との比率、後者は同じくすべての玄米数との比率のことである。

作況調査で果たす役割は、前者が収穫予想、後者は収穫結果の予測につながる資料ということである。

本論に入る前に専門用語をあらためて確認しておこう。作況調査には「基準筆」と「標本筆」という用語が出てくる。筆は圃場のこと。基準筆は、地域の代表選手のような生産者の圃場から農水省が選び、全国に551筆。一方の標本筆は所ジョージの「日本列島ダーツの旅」のように無作為で選んだ圃場で全国に1万178筆。作況調査の基礎資料となるのは主としてこちらの方だ。数字はいずれも2018年産。

さて前置きが長くなった。窪田課長から「間違い」と指摘を受けたの

は、この記述。

「登熟歩合」の実測は、基準筆に適用していても、標本筆には適用していない。手抜きは欠陥調査だということが裏付けられたことになる」

これに対する窪田課長のクレームは、「登熟歩合」は、「標本筆にも適用しているもので、記述は間違っている」というものだ。一瞬「間違ったかな」と思った。いったん電話を切り、作況調査の調査員が手にする「標本（基準）筆調査票」（調査票）を確認してみたら、すぐ窪田課長ののでっぴ上げに気がついた。確かに「登熟歩合」は、標本筆にも適用されているが、それは収穫後の刈り取り調査が対象だ。そう反論すると、今度はこう言い返してきた。

「9月15日時点は、調査対象の3割は刈り取り調査の対象となっているので、標本筆でも『登熟歩合』は調べている」

11月号では、9月15日時点での作況指数が実態とズレがあると指摘していた。その時点での作況指数は、収穫予想になる。従って、その時点では「登熟歩合」のことは対象にはならない。対象となるのは、収穫結果の予測につながる収穫後の刈り取り調査のときだ。どうやら窪田課長は刈り取り前の収穫予想と混同していたようだ。

## 虚偽文書で 自ら墓穴を掘った

窪田課長が墓穴を掘ることになったのは、標本筆への歩留まり調査の証拠を求めたときである。当初、部下が作成したと思われるメモを電話口で読み上げてきたが、早口なと専門用語がやたら多いので聞き取りができず、FAXで送ってくれるよう注文した。当初、送付を渋ったが、要求に応じてくれた。タイトルは、「水稲作況調査9月15日現在の『千もみ当たり収量』の予測について」。

（説明変数）

- ・ 1㎡当たり全もみ数
- ・ 沈下もみ数歩合
- ・ 10a当たり平均収量
- ・ 出穂前20日間の平均気温
- ・ 出穂後40日間の平均気温

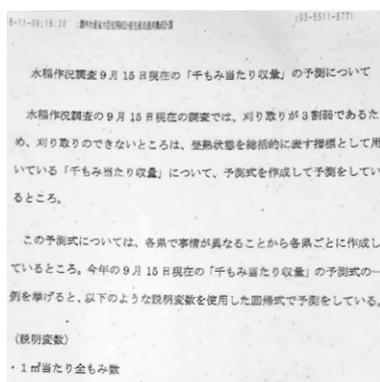
これは虚偽の内容だ。「説明変数」として2項目目にした「沈下もみ数歩合」のことである。これは稔実調査だ。調査方法は、政府統計の「e-Stat」にきちんとした定義がある。

「比重選の方法は、バケツ等の容器に水を入れ、これに抽出した試料を入れ、よく攪拌する。その後、2分間位置き、もみの沈下及び浮上の状況を確認し、浮上もみをすくい上げる。次に沈下もみをすくい上げる。次に沈下もみをすくい上げる。紙等に分けて広げ水を切る」

あらためて調査票に目を通してみた。まず「千もみ当たり収量」とい

9月15日現在の水稲作況調査では、刈り取りが3割弱であるため、刈り取りのできないところ（7割）は、登熟状態を総括的に示す指標として用いている「千もみ当たり収量」について、予測式を作成して予測をしているところ。

この予測式については、各県で事情が異なることから各県ごとに作成しているところ。今年の9月15日現在の「千もみ当たり収量」の予測式の一列を挙げると、以下のような説明変数を使用した回帰式で予測している。



虚偽文書

# 辛門

思わず、「馬鹿者」と叱りつけてやろうかと思っただが、「それらは、いずれも外観形状についての数々の調査だろ

う表現の記述は、調査票のどこにも見当たらない。「3刈り取り調査」に「千粒重測定」という記述はある。ただしこれもみみではなく玄米のことである。次いで「沈下もみ数歩合」に該当する調査項目は、4ページ目の「5稔実歩合調査（作況基準筆調査のみ）」のことと思われるが、これも括弧書きが示すように、「作況基準筆調査のみ」だ。

その旨、窪田課長に指摘すると、珍妙なことを言い出してきた。「稔実歩合」調査は、「登熟歩合」の中に含まれていると言い換えてきたのだ。それは収穫後の調査だ。それで「稔実歩合」をどうやって調べるのか。開いた口が塞がらなかった。

データメな説明はまだある。その文書をFAXで送ってくる前のことだった。相手に調査票をともに置くよう指示してやりとりをした。標本筆には、「稔実歩合の調査が対象になっていない」と指摘すると、それは3ページ目の「4草丈・莖数・穂数・もみ数調査」でカバーしていると言いついてきた。

## いまこそ統計改革を！ 人海戦術からIT駆使へ

統計部がずっと悩まされてきたのは、職員のリストラ。それに伴う労使軋轢だった。そのリストラは、ある意味ですさまじかった。

統計業務の手足となる地方組織の定員は、戦後間もない1948年のピーク時には1万9,626人もいたが、相次ぐ行政改革や2004年の「農林水産統計の抜本的見直し」で、統計の定員は激減した。ただ、作況調査に携わる職員数にはさほど大きな変化はなかった。

このリストラによって統計の正確さが失われたという見方が一般的だが、筆者はそうは思わない。正確さを失った最大の原因は、リストラを進めながら、統計調査の手法を抜本的に改めなかったことにあるからだ。企業の合理化は日常茶飯事である。リストラで人を減らしたら、企業は機械化などで業務の質が落ちないようにするものだ。

統計のリストラを進めながら、農水省は、機械化やIT導入の取り組みが万全だったとは思えない。いまも統計手法は旧態依然たるものがある。人海戦術の調査手法を墨守していることだ。極端にいえば、定員2万人態勢時代の調査手法をそのままスケールダウンしたのではないかという印象さえ受けてしまう。これでは正確さは期待できない。

統計調査の特質は、単純作業と季節性にある。機械に置き換えやすいものだ。例えば、問題とした「稔実調査」も、もみを投入すれば自動的に判別する機械装置は、町工場の技術力でも十分に作れる。開発経費も職員100人程度のリストラで浮く1年間の人件費で間に合いそうだ。

その機械化と並行して進めるべき大事なことがある。少数精鋭の調査担当者を育成することだ。地方公務員や農協職員のOBを安易にリクルートするのはダメだ。

観察力に優れた者を選抜することがキーポイント。少数精鋭の調査担当者なら、稲の作況調査で主産地でも1県数名程度で正確な調査ができる。そして本省の管理部門が最優先にすべきは、気象変動、栽培の技術革新などに即応できる調査設計だ。

統計の安定的な正確さを実現するには、IT導入、観察力に優れた調査担当者の養成以外に王道はないと思う。

う。稔実しているか不稔かを調べるには、もみを半分にする作業が必要になることはお分かりかな。外観形状だけでは、絶対に「稔実歩合」は出てこないぞ」と教えてやった。それに対する窪田課長の答弁は珍妙すぎた。

「もみを半分にするような作業は耕作者の理解が得られないからできません」

こればかりは「馬鹿者」と叱りつけてやった。先の外観形状検査を実施する際、実測のため耕作者の許可

を得て稲株を刈り取っている。その許可があれば、もみを半分にする許可が必要になることはない。窪田課長が調査の実務も現場のことにも精通していないことがこれで立派に裏付けられた。

## 「統計は自分たちのもの」という勘違いと奢り

取材を終えてから、あらためて文書を読み返してみた。すぐ嘘と分かるような文書を送ってきた生産流通消費統計課の動機を考えてみたかっ

たからだ。

歩留まりが論点だったので、窪田課長は、「沈下もみ数歩合」という文言さえ使えば、相手は納得するだろうと当方を甘く見たのではなからうか。その文書を起案したのが、窪田課長か、その部下か、これは統計部の調査を待つしかないが、思い浮かんだことは、課長も部下も、統計は自分たちのもの、省内でも自分たちしか分からないはず、他人が横から口出ししてくるな、そんな勘違いの奢りがあったということだ。